2013年3月14日 Citrina 通信 No.401

## Citrina 通信 No. 401



## 「谷のギフチョウ」里帰り

"The Gifu-butterfly of Tani" going back home

加藤義臣/Yoshiomi KATO

2009年3月、私は永年勤めたICUを定年退職しまし た。武蔵野の一隅に位置する ICU キャンパスには結構 いろいろのチョウが生息していましたが、やはりなんと言 っても目玉はオオムラサキです。もちろん現在はもう見 られませんが、1950年代大学設立期の頃にはまだ姿を 見る事ができたようです。さらにその前にはこの武蔵野 の雑木林はオオムラサキの大産地であったことを、東京 農工大学の一瀬太良先生から聞いていました。そこで、 その標本がどこかに残されていないかと、農工大の応 用昆虫学研究室の標本ダンスを探させてもらいました が、見当たりませんでした。

ところが、そこには現在は絶滅している産地の貴重な もの(例えば、日光大沼のオオゴマシジミなど)が収まっ ていました。私の目を惹いたのがギフチョウの標本です。 全部で3頭あり、2頭には残念ながら採集ラベルがあり ませんでした。しかし、幸運にも1頭にはラベルが付い ていました(写真 1)。これが問題の発端でした。ラベル には手書きで「1/4 '38 Tan-, Inasa Coll. Watanabe」と 書かれていました。採集日は1938年4月1日、採集者 は Watanabe という方であることは容易に判別できました が、採集地とおもわれる「Tan-, Inasa」は見当もつきませ んでした。

それで、旧日高研究室の方々にメールで問い合わ せてみたところ、一人の方から「Inasa」は静岡県の「引 佐」(浜松市)ではないでしょうか、という返事を貰いまし た。この時点で、もし私がギフチョウマニアかそれに近 い者であったとしたら、もう1つの地名「Tan-」は容易に 推測できたのではないかと思います。不運なことに Tan の次の文字はちょうど針孔に当たっており、読み取れま せん。「た」で始まる地名を「引佐」とともにネット検索し ましたが、該当するような地名はヒットしてきませんでし た。

これはもう地元の方にお聞きするしかないと思い、静 岡昆虫同好会の北條篤史さんにこれまでの経過をメー ルし、この「Tan-」がどこかをお尋ねしました。年が明け て、2010年1月2日のことです。北條さんは早速、浜松 在住の「静昆」のチョウ屋さん達に連絡をとってくれ、そ の返事が4日後に届きました。それは素晴らしいもので した。採集者の Watanabe は、渡辺一雄で、浜松で活躍 されていたアマチュアの蝶屋さんでした。次に問題の地 名です。地名の「Tan-」は Tani(谷)であり、当時の引佐 郡都田町谷であるとのことが判明しました。この場所は ギフチョウの産地として地元では有名だったようです。 1958 年、高橋真弓さんも都田を訪れてギフチョウを採 集されていましたが、その頃には谷駅周辺にはギフは もういなかったとのことです。一件落着です。さらに、旧 農工大日高研の先輩である高田誠さんからメールを頂 きました。昔のコレクションに「谷」地名のギフチョウが1 頭あるとのことです(写真 2)。本人が採集されたのでは なく、「新昆虫」の標本交換欄を見て入手したとのことで す。

実際、浜松市立動物園昆虫館には渡辺一雄氏により 「谷のギフチョウ」が紹介されています(写真3)。この画 像は同園昆虫館の山下孝道さんが撮影して送ってい ただいたものです。当時の状況が偲ばれますので、ここ にその文面を紹介しましょう。「浜松市東田町と引佐郡 奥山間20数キロの間に奥山線軽便鉄道がはしってい た。その中間の谷(都田町)は無人の停留所で、蒸気 機関車で焼けた石炭殻を捨てたり、水の補給するところ であった。付近にはギフチョウの幼虫が食べるヒメカン アオイが一面に生え、蝶が吸蜜するカタクリ、ハルリンド ウ、ショウジョウバカマなどが春の野を飾った。時は移り 昭和30年代中頃には春の女神ギフチョウの姿は消えた。 最初の発見は昭和7(1932)年、中学生だった渡辺一

2013 年 3 月 14 日 Citrina 通信 No.401





写真1. 東京農工大学応用昆虫学研究室に保存されていたギフチョウの標本とそのラベル



写真2 谷産のギフチョウ標本とその記録 高田誠氏撮影 (1955年3月28日採集、浜松市立動物園昆虫館展示の標本)

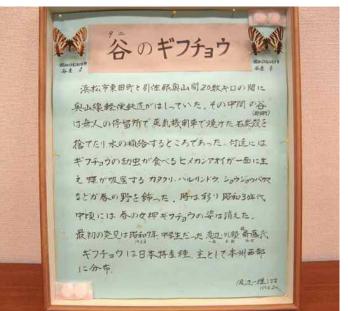


写真3「谷のギフチョウ」について書かれたパネル (浜松市立動物園昆虫館展示)山下孝道氏撮影

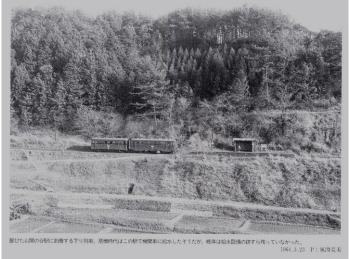


写真6 在りし日の奥山線、谷駅 1964年3月23日 風間克美氏撮影 『追憶の遠州鉄道奥山線』(2000)(飯島巌著 ネコ・パブリッシング発行) より転載



写真4 奥山線谷駅周辺の線路跡 2012年4月5日 山下孝道氏撮影

2013 年 3 月 14 日 Citrina 通信 No.401



写真5 線路際に一株生えるヒメカンアオイ 2012年3月18日 筆者撮影



写真7 タチツボスミレで吸蜜するギフチョウ 2012年4月5日枯山付近にて 筆者撮影

平成24年(2012年)4月14日(土曜日) さんが浜松市動物園昆虫館(西区舘山寺町 と突き止めた。当地では既に絶滅した幻の 標本がこのほど、 さん(69)が見つけ、 農工大の研究室で保管されていた標本を同 年に採集された幻の へOBで国際基督教大名誉教授の加藤義E 浜松市内で74年前の1938 nasa」から旧引佐郡での採集 故郷に里帰り 現地に戻そう」と加い ラベルにあったローフ 「ギフチョウ」 ら、谷のギフチョウ」と名 見し、6年後に採集した 日所に遠州鉄道奥山線の 「茶と判明した。 当時 **公都田町)で繁殖地を発** 谷駅」があったことか 記録ラベルの資料など (昭和7) 年に当時 加藤さん (右) の手により74年ぶりに里帰りしたギフテョウの標本 (現·北 浜松市西区館山寺町の市動物圏昆虫館 せる。 ったと聞き、 長い年月の経過を感じさ さ) 5・3たの雄で、羽 滅してしまったという。 の模様が退色するなど、 あらためて感じた」と加 この一件で、 せたいと思った。また、 (羽を広げた時の大き 動 · ラベルには 物 ん(65)は る。標本を受け取った見 ウ生息地は、 ってもらいたい 自然が豊富だったという や富士宮市芝川町など、 地の特定に結びついた。 虫館管理者の山下孝道さ 狭い範囲に限られてい 証拠。この標本で、 な環境の大切さを感じ 「浜松市も昔は と話し 左は 泉 2012年4月14日付け静岡新聞に掲載の「谷のギフチョウ里帰り」記事

雄・川瀬英嗣・故斎藤倫理。ギフチョウは日本特産種。 主として本州西部に分布。 渡辺一雄しるす 1994. Jan.」

私は2012年3月、所用で京都方面に出かけることがあり、帰路、昔のギフチョウ多産地であるこの地をぜひ訪れてみたいと思い、チョウの季節にはまだ早かったのですが、帰路新幹線を浜松で途中下車して引佐を訪れました。浜松駅には地元の蝶屋である杉山友英・鈴

木利和の両氏が車で迎えに来てくれていました。まずは、ギフチョウの現在の産地である渋川の枯山(浜松市北区引佐町渋川)に行く事としました。小雨の中、山はまだ枯れ木でしたが、この地でのギフチョウの食草となっているヒメカンアオイを見ることができました。もちろんチョウの姿はなしです。

続いて、今は失われた「谷」のギフチョウ産地に案内いただきました。昔、谷駅があったと思われる場所です(写真4)。現在は鉄道も廃止され、住宅地の一角となっていましたが、当時の線路跡はまだ残っていましたし、周辺からはヒメカンアオイも一株ながら見つかりました(写真5)。写真6は1960年代に撮影された谷駅周辺です。ギフチョウが飛んでいないかとつい目を凝らせてしまいます。

やはり4月のギフチョウの時期にぜ ひ来てみたいものだと思い、再度鈴 木さんに案内をお願いしました。その

年の4 月5日のことです。東京発7時頃の新幹線で駆けつけました。風がちょっと冷たかったですがまあまあの天候でしたので、ギフチョウが期待できそうです。山中のポイントに来る頃には日差しも出てきました。そうこうするうちに、ギフが飛び出してきました。早速カメラを向けるのですが、なかなか止まってくれません。やっとスミレで吸蜜を始めましたが、敏感です。それでもなんとか撮影することができました(**写真7**)。念願達成です。

2013 年 3 月 14 日 Citrina 通信 No.401

帰路、浜松市動物園昆虫館の山下さんを訪問しました。持参のギフチョウ2頭を里帰りさせるためです。これらは、農工大応用昆虫学研究室の岩淵先生と私の友人高田先輩から譲り受けた2頭です。1938年採集というこんな昔の標本は昆虫館にも残されていないとのことでした。ちなみに当日、山下さんの計らいで静岡新聞記者の取材を受けました。そのことは、2012年4月14日静岡新聞に掲載されました(写真8)。この写真は当日同行していただいた鈴木さんが送付してくれたものです。

以上が谷のギフチョウにまつわるエピソードです。ところで、当初の探索目的であった、武蔵境のオオムラサキはどうなったのでしょうか。こちらは現在東京農業大学進化生物学研究所に所蔵されている一瀬コレクションの中に見つかりました(写真9)。写真は1953年6月に蛹で採集されたものです。私の学生時代指導教官であった、一瀬先生からは当時はチョウの話をほとんどきいたことがありませんでしたので、これほど素晴らしいコレクションをお持ちだということを知ったのは先生が亡くなられた後でした。



Tokyo Pref.
June 6, 1913.
Coll.T.ICHINOSE
(Pupa)

Taira Ichinose Collection Tokyo JAPAN RIEB Collection 2006

写真 9 東京都武蔵境産のオオムラサキとそのラベル 東京農業大進化生物学研究所所蔵

昨年、Citrina通信361号(2012)に一瀬先生採集の「ベニモンクロアゲハ」(クロアゲハの異常型kagaribi)の記事を書かせていただきましたが、その中で述べた私の疑問、すなわち「ベニモンクロアゲハがなぜ林コレクションに所蔵されていたのか?」ということです。これについては藤岡知夫さんから大変興味あるお手紙をいただきました。その概要を以下に紹介させていただきます。

一瀬さんは藤岡さんの母校、高等師範付属中学校 (現在の筑波大学付属高校)の9年先輩にあたります。 この学校からは磐瀬太郎氏や林慶氏などの多数の蝶 研究家を輩出していますが、一瀬さんは林さんの家で 開かれる会合に出ていたとのことです。林さんの会合で は面白い異常型を採ると、持参して皆に自慢した後に 林さんのコレクションに収められるので、該当の「ベニモ ンクロアゲハ」もその運命をたどったように思います。た だ、この標本には一瀬太良所蔵というラベルが付けら れており、あくまでも所有は自分のものだという強い意 志表示をされていたとのことです。もう一点、一瀬さんの ために申しあげておかなければならないという前置きで、 大変興味深いことが記されていました。「一瀬太良氏は 本州のエゾスジグロシロチョウ Pieris napi japonica(現 在のヤマトスジグロシロチョウ※)の最初の発見者だと いうことです。これは白水隆氏により別亜種として記載 されましたが、我々林慶グループの間ではその10年近 くも前から旧知の事実で、林さんはこれを"スジグロシロ チョウX型"と呼びましたが、一瀬さんは"モンシロチョウ 型スジグロシロチョウ"と呼んでおられました。」私は藤 岡さんからの手紙を拝読して感慨無量でしたが、さす が一瀬さん!と納得の思いでした。(※筆者ルビ)

本稿を記すにあたり大変多くの方々にお世話になりました。以下にお名前を記して、深謝致します。北條篤史・高橋真弓・鈴木利和・杉山友英・山下孝道の諸氏(静岡昆虫同好会)、岩淵喜久男・高田誠・高橋啓暢の諸氏(東京農工大関係)、藤岡知夫氏(日本蝶類学会(フジミドリシジミ)会長)、山口就平・青木俊明の両氏(東京農大進化生物学研究所)、(株)ネコ・パブリッシング。

(かとう・よしおみ/記 2013 年 2 月 20 日)

タイトル画像:ギフチョウ♂ 静岡県浜松市産

Citrina 通信 No.401 2013 年 3 月 14 日 発行 定価:100円

発行人: 寺章夫 〒178-0063 東京都練馬区東大泉 6-31-21 terra-aa@qb3.so-net.ne.jp